カラフル 博多湾の世界

福岡でダイバーたちが写真展

カラフルな魚に、きらめく海草――。博多湾にすむ生き物たちの姿を見てもらおうと、福岡市東区で水中写真展が開かれている。「身近な博多湾も、潜ればこんな世界が広がっている」。それを伝えようと、ダイバーたちが企画した。

黒や黄の水玉模様のミズタマウミウシが、赤いウミシダやチゴケムシと漂む。悠然と泳ぐアカクラゲ、おどけた表情の魚のイソギンポ、海草にかくれんぼするタツノオトシゴやマダコー。カラフルな水中写真はすべて博多湾で昨年、ダイバーが撮影したものだ。

博多湾にある極彩色の世界。中央がミズタマウミウシ、その奥がウミシダ、手前がチゴケムシ

ヒメイカ。体長1㌢ほどで、世界最小のイカと言われる

「これを見て、福岡の海に誇りを持って欲しいんです」。この「博多湾の水中写真展」を企画した一般社団法人「ふくおかFUN」の代表理事、大神弘太朗さん(30)は言う。

大神さんは福岡市のダイビングインストラクター。19歳から各地の海に潜ってきた。地元の博多湾で潜るたび、特に湾の入り口に近い北西部では、海外や沖縄に負けないほど豊かな生態系があることに気づいたという。「水中の世界を伝えられるのはダイバーだけ。『福岡の海は汚くて生物も少ない』というイメージがあるなら、それは僕らの責任でもある」。そう考えて一昨年12月、海の自然を伝える「ふくおかFUN」を立ちあげた。

ダンゴウオの幼魚。体長は2㌢ほど＝いずれもふくおかFUN提供

タツノオトシゴ。体長5㌢ほど。博多湾で年中観察できるという

昨年2月、福岡市内外のダイバー18人に、博多湾の写真の撮影を呼びかけた。特に透明度の高い福岡市区宮浦の唐泊沖を中心に5千点が寄せられた。約50点を厳選。大小計35のパネルに仕上げた。

写真のパネルは今年1に福岡市役所1階ロビー展示。今月2日からは、市東区和白丘1丁目の和地域交流センター2階でネル13枚を展示している22日まで。「たくさんの人に見てもらって、この自然を次世代に残したい」と大神さん。問い合わせは、ふくおかFUN（092・809・2080）へ。

（渡辺純子）

朝日新聞(2/10)：九州、沖縄、山口エリアに掲載

博多湾の多様な生物 写真展

ダイバーらでつくる団体 ネットで資金募り開催

福岡市役所で25日まで

福岡の自然の魅力を伝える一般社団法人「ふくおかFUN」が、福岡市役所1階ロビーで、水中写真展「博多湾～唐泊の海に生きる～」を開いている。海への関心を幅広く掘り起こそうと、インターネットを通じて資金を募る「クラウドファンディング」で開催費を確保した。代表理事の大神弘太朗さん(30)は「多くの方々に福岡の海のしさを知ってほしい」と呼びかけている。（椋木太一）

写真展の会場で開催の意義を語る大神さん ▶

同法人は昨年12月、ダイビングインストラクターの大神さんが中心となって設立された。メンバーは福岡県内外のダイバーらで、漁協や大学、NPO法人などと連携し、博多湾などの生態を調査している。「海の学校」と銘打ち、ダイバーに環境調査の知識や技術を教えるほか、水中がれきの撤去など災害支援活動のトレーニングもしている。

写真展は、身近な福岡の海にも多種多様な生物がいることを知ってもらおうと企画した。自然への興味をより深めてもらうには、写真展の趣旨などを幅広い層に理解してもらい、開催資金を募った方が得策だと考え、クラウドファンディングの手法に着目。開催に向けた目標資金42万円に対し、8月から1か月半の募集で48万円が集まった。

メンバー18人が3～8月、糸島半島沖の博多湾で海中写真を撮影したといい、会場には約250点が並ぶ。順路に従って3月に撮影した作品から8月に撮影した作品までを順番に展示しており、博多湾の季節の移り変わりを感じられる。

大神さんは「クラウドファンディングの出資者には『自分たちで作った写真展』との思いを抱いてもらいやすく、関心が一層集まる」と手応えを語り、今後も同様の手法で展覧会を続けていきたい考えだ。

市役所での写真展は25日まで。入場無料で午前9時から午後6時まで観覧できる。問い合わせは、ふくおかFUN（092・809・2080）へ。

読売新聞(12/19)：福岡地方版に掲載